

第 30 回いたばし国際絵本翻訳大賞 英語部門 講評

今回の課題絵本 If I had a little dream は、詩の形式で書かれた絵本でした。もし小さな家があったら、小さな池があったら、小さな椅子があったら、小さな猫を飼っていたら、弟がいたら……主人公は想像を巡らせます。今回、まず難しかったのは、この家や池や椅子や猫や弟に主人公がつけた名前をどう翻訳するか、ということだったのではないのでしょうか？なぜなら、その名前の多くが抽象的な言葉だからです。「Love」「Whole」「Wonder」「Strong」……。訳すには、主人公が（作者が）対象のどういう特徴から連想して名前を選んでいるのか、ということまで考えなければなりません。

また詩のような形で書かれているということにも、頭を悩ませた方が多かったのではないのでしょうか。もちろん、原文のように韻を踏むことができればいいのですが、英語の詩と日本語の詩では「韻をふむ」方法がちがいますし、それ以前に、英語の単語を日本語にすれば、その時点で（奇跡的な偶然でもない限り）韻を踏むことはないでしょう。このコンクールでも何度か言っているとおり、今回も、英語の原文を読んだときの、リズム、楽しさ、心地よさ、を日本語でも感じるができるか、ということを考えながら審査しました。つまり、訳文が韻を踏んでいなくても、リズムよく訳せていれば、作者の意図は（ある程度）訳せた、と判断したということです。

そして最後に、子どもの読者が楽しめるように訳せているか、ということも審査の対象にしました。一見、抽象的な概念について語られているようにも読めますが、よくよく読むと、とてもシンプルで具体的なことを語っていることがわかります。「池」はたしかに、池の上や中に「Wonder」がたくさんあるでしょう。テーブルはみんなで囲んで、おいしいものをいっしょに食べる「Sweet」なところですし、猫って、なにをされてもなぜか怒れないし、むしろ笑ってしまう「Curious」な存在ですよね。使われている単語も、やはりシンプルでやさしいものだと思います。

実は、わたし自身、テキストを何度も何度も読んで、さらに、みなさんのいろいろな訳を「どうしてこう訳したのかな」「なるほどそういう解釈もあるのか」「この言葉の響き、いいな」などと考えながら読みこんでいるうちに、たぶん三周くらい回って、この絵本は子どもが楽しめる（もちろん大人もですが！）作品だという原点にもどってことができました。絵本の翻訳って、本当に難しいですよ。

では、具体的な審査のポイントをお伝えします。まず、一次審査では、全般的なこととして、

- ・ 誤訳はないか
- ・ 読みやすい文章になっているか（ちゃんと日本語になっているか）
- ・ 誤字脱字はないか
- ・ 原文にない勝手な補足（不必要な付け足し）がされていないか
- ・ 訳しもれはないか（「said ○○」の省略など、意図的な工夫は OK）
- ・ 誤った日本語が使用されていないか

- ・訳文が絵に合っているか
- ・不必要・不自然と思われる極端な幼児語が使われていないか
- ・創作になっていないか
- ・絵本にふさわしい言葉・漢字が使用されているか（対象年齢が意識されているか）

などを審査しました。

またこの絵本の特徴を生かしているかという点では、

- ・「If I had a little ～」と「I would name ～」という部分が各ページ共通している。訳で必ずしも統一する必要はないが、繰り返しであることがわかるほうがベター。
- ・「If I had a little ～」「I would name ～」などが仮定法であることを理解した上で訳を工夫すること。
- ・単語の頭が大文字になっている「There」「Love」「Whole」などは名前なので、名前らしく訳すか、なんらかの工夫をすること。「ゼア」「ホール」などと機械的にカタカナにして、読者に意味が通じなくなっている場合は減点。
- ・基本的に2行目と4行目が韻を踏んでいる。訳もリズムカルにできれば理想的だが、無理に韻を踏まなくてもOK。また、原文は韻を踏むために少し無理をして単語を選択している可能性があるのも、それをわかった上で原文から多少離れるのもOK。

といったことをチェックしました。

次に各ページのチェックポイントをいくつか、ご紹介します。

P.01 land

「とち（土地）」という直訳では表現が固いので、やわらかい訳語に工夫できればベター。絵に合わせて「やま」「おか」などとする手もあるが、「くに」や「しま」ではないので要注意。

P.01 There

「そこ」や「あそこ」という直訳ではなく、なんらかの工夫ができればベター。「my home」になるところを表現するのに他にどんな言葉があるか？ 意味を考えながら名前をつけること。

P.01 home

この「home」を物理的な「家」と解釈し、「There は私の家になる」という方向で訳すと、P.03の「If I had a little house（もし小さな家があったら）」とうまくつながらなくなるので、P.01の「home」とP.03の「house」を訳し分けるか、あるいは「There (land)」と「house」が同じものだととられないように文章を工夫する。

P.01 be it stormy be it fair

「嵐の日でも晴れの日でも」という慣用表現であることに注意。

P.05 Whole would be filled
with roots and seeds,
and feed my heart and soul.

直訳すると不自然になりそうな英文なので、要注意。「heart and soul」はまとめて「心」などと訳しても OK。

「Whole」の意味もよく考えること。「be filled with roots and seeds」であり、かつ「feed my heart and soul」でもある「Whole」とは？

P.11 to see so many things

「たくさんものを見るために」(目的)というより、いろんなところへ連れて行って、その結果として「たくさんものを見せてくれる」というニュアンス。

P.15 Strong would hold me when I needed rest until friends came along.

「hold」は「支える」の意味。主人公を物理的にぎゅっと抱きしめているように読める訳は絵と合わないので注意。

「Strong」についてもよく考えること。「hold me when I needed rest until friends came along」である「Strong」とは？

P.18 no matter where we stood

「どんな状況でも」「どんなときでも」「どこにしようと」というようなニュアンス。ここの「stood」は単純な「立つ」の意味だけではないことに注意。

P.19 I would name him Curious.

ネコは「him」なのでオス。無理に訳に表さなくても OK。

P.20 Curious would make me laugh,
使役動詞の「make」が理解できているか。

P.26 our story would never end

「our story」(ともだちとわたしの物語)がずっと続くというニュアンスが伝わればベター。

P.27 全体

訳文の入るスペースが限られているので、あまり長い文章にならないよう注意。

P.28 Nest

「nest」の意味は「the home, thought of as the safe place where parents bring up their children」であることに注意。単なる「す」ではなく、工夫できればベター。

P.28 so they would let me rest.

「so」は結果の「so」、「they」は直前の「thoughts and dreams」を指していることに注意。

P.29 I would name it You.

「You (あなた)」は「dream」でもあり、自分や読者でもあると思われる。「ママ」「お母さん」などと限定しないこと。このページだけ「I」が母親で「You」が主人公の可能性もなきにしもあらず。読者がいろいろなことを想像できるような、広がりを持った訳にするほうがベター。

一次審査でも、プロの翻訳者の目線から、訳文を表面的に判断せず、「なぜその文にしたか」ということまで考えて審査しています。

結果、応募774作品中、28作品が最終選考に進みました。

最終選考でも、基本、一次審査と同じ点を大切に審査しました。

最優秀翻訳大賞の『ちいさな ゆめが あったなら』は、原文と同様、とてもシンプルで、とても平易な言葉で、訳されていました。しかも、リズムもとてもシンプルで、とても自然に読めます。例えば、このページ。

ちいさな おいけが あったなら、
ふしぎ と なまえを つけましょう。
みずのうえや そのしたの、
うつくしいものを みせてくれる。

「above the water and under」は意外に訳しづらいので、いろいろ工夫をしている方がいらっしやいましたが、時には、却って読みにくくなったり、訳者の解釈が前面へ出すぎているものもありました。でも、この訳はそのまま素直に訳されていて、でも一方で、「そのしたの」と「その」をつけることでさりげなく(悪目立ちせず)リズムを整えています。一見なんの変哲もない訳にも見えますが、それこそが難しいと思うのです。

また、「Strong」を「ちからもち」、「Curious」を「しりたがり」などは、もちろんとてもいい訳ながら、ほかの方の訳でも多く見かけたのですが、「Love」を「まごころ」、「Sweet」を「おもいやり」と訳していることには、深く納得しました。言葉の意味から離れすぎず、なおかつ「あったかいきもち=happy」「てぶくろ」「まもってくれる」や、「みんなで」「わけっこ」「おいしいもの」との相性も抜群でした。

最後の終わり方も、シンプルだけど、しっかり終わっていて素敵です。

あなたが いるから ここは まほう、
ねがいが ぜんぶ かなう ばしょ。

よく読めば、原文の通りですよ。

優秀賞の『わたしの ゆめみる なまえ』は、各ページの最後の文をすべて統一させています。「わたしが かえる ところは 『あそこ』。」「わたしを くるんで しあわせに してくれる『あい』。」「そんな おにわ だから 『かんぺき』。」原文のリズムをこんなふうに再現しているのです。原文の意図とも合っています。

きのね と たねが いっぱいで、
わたしの むねも いっぱいに してくれる、

ふたりでなら とびたつて いける、
くうき みたいに かけがえのない「そら」。

なども、原文の意味を深く考えたうえで訳していることがよくわかります。

特別賞の『ちいさなゆめ』の方は、「There」を「かなた」という美しい言葉で訳しているところや、「feed my heart and soul」を「わたしの こころも ぐんぐん そだつの」と「庭」にふさわしい文章で訳しているところなど、やはりすばらしいところがたくさんありました。いぬの「よっしー」、ねこの「にゃんだろー」もいいですね。でも、ほかの訳語とのバランスがほんの少しちがうかな？ 「ねっこ」が「うえられている」という把握（根っこは植えないかも？）や、「Sweet」の訳語が「おかしやさん」（おかしやさんは わけあうところ？）などはもう一工夫できたかと思いました。

『ちいさな ゆめが あったなら』の方は、すべて「もし」で始めて、リズムをつけているところ、そしてそうすることで、このお話のエッセンスをうまく伝えているところ、がとてもよかったです。「その場所」「愛の家」「強いうで」という把握もとてもよくわかるし、それはそれで素敵だったのですが、全体的に少し子ども読者には難しい訳になっていると感じました。

『たとえば わたしに ゆめがあったら』の方も、全体的な文体が安定していて、声を出して読みやすかったです。今回、全体を通して文体が一定していないと感じさせる訳が散見されたなか、一冊の作品として完成していると思いました。「しあわせに きづかせてくれて」、「りくちや すいちゅうの」「はかりしれないくらい（中略）てらしてくれる」などの表現が、もう少しこなれた日本語になってもいいかもしれません。

繰り返しになりますが、今回は、わたし自身、平易な言葉を使って訳す難しさとすばらしさをつくづく感じました。翻訳する際、いくら原文が読みこめていても、わかっているのが自分だけでは、不十分です。それを、どう読者に伝えるかというアウトプットのほうも、作品理解のインプットと同じように重要です。ね。

あとは、毎回言っていますが、ぜひ声を出して訳文を読んでみてください！ 気がつくことがたくさんあると思います！

英語部門 審査員 三辺律子